

進化したGBRの効果とテクニック Evolved GBR effectiveness and techniques



Tomohiro Ishikawa
石川 知弘
医療法人社団 石川歯科

1990年代、国内においてはまだ、インプラント治療は欠損補綴の手段として認識されはじめた段階であった。当時はインプラント埋入を可能とする骨量があることが条件で、固定性補綴装置で機能回復できれば、一定の評価がなされていた。2020年代のインプラント治療は、咀嚼機能のみならず、審美性、快適性において高い完成度が求められ、さらに、いかに低い侵襲、短い治療期間で達成できるかが議論されている。この課題を可能にする技術革新のなかの一つに骨増生技術の進化がある。特にGBRは骨造成処置のなかで、最もポピュラーで約30年の間、マテリアル、テクニックに関して多くの研究改良を重ねられてきた。

外側性のGBRによって、骨量の不足する部位の埋入を可能にして適応を拡大し、また、補綴主導の埋入によって審美性、良好な清掃性を獲得できる。そのためには、スペースの形成と維持、感染を防御するためのフラップマネージメント、さらに、患者の限定された治療のポテンシャルに対応することが重要となる。

現在スペース維持のためにコラーゲン膜を応用したソーセージテクニック、クロスリンクコラーゲン膜、チタンメッシュ、非吸収性膜が開発されている。それぞれ長所短所があり、臨床状況に応じた使い分けが必要である。長期間形態を維持し続ける必要がある場合は非吸収性膜が確実であり、なかでもチタンハニカムメンブレンは三次元的な賦形性に優れ、扱いやすいと考えている。

またフラップの減張テクニックに対する知見が深まりより安全に処置を進められるようになったと思われる。

本講演ではGBRの効果とテクニックについて症例を通して解説したい。

【略歴】

- 1988年 広島大学歯学部卒業
広島大学歯学部口腔外科第一講座
- 1990年 浜松市内勤務
- 1996年 静岡県浜松市にて石川歯科開業
- 2008年 5-D Japan 北島一、船登彰芳、福西一浩、南昌宏 と共に設立

【現在】

- 5-D Japan ファウンダー
- 日本臨床歯周病学会指導医
- 日本歯周病学会会員
- 日本口腔インプラント学会専門医
- 日本補綴歯科学会会員
- アメリカ歯周病学会会員
- AO (Academy of osseointegration) 会員
- EAED (European Academy of Esthetic Dentistry) affiliate member
- 静岡県口腔インプラント研究会 顧問
- OJ 相談役

【近著】

- 新版 4-D コンセプトインプラントセラピー
- 審美性と機能性獲得に必要な組織保存と再建のテクニックとそのタイミング
- クインテッセンス出版